世界選手権 2005 予想
日本選手への期待

タケトがスバリ！世界戦

小林岳人

小林岳人（こばやしたけと）。知るひとぞ知るオリエンテーリング通。そのタケトがこの夏に愛知で開催される世界選手権をスバリ予想する。

スキーO 競技中の岳人。夏も冬も世界通。

荒れるロング決勝。
日本予選突破はミドルがカギ？
スプリントは日本予選突破を期待。
スプリント決勝は順当な結果か？

「未知」の世界選手権大会

日本での世界選手権大会はある意味、外国選手にとっては極めて公平なステージが用意されたと考えられている。

オリエンテーリングのビッグイベントは北欧での開催がその中心であり、北欧のテレインはまた、北欧の選手にとって一般的に有利に働くと考えられている。北欧以外の外国選手にとっても、「北欧人は生まれてから 1000 回以上も北欧のテレインでオリエンテーリングをしている。これじゃ自分たちにとっては明らかに不利」だと。上位を狙う国々にとっては本当の意味での公平な舞台であると。日本は外国選手にとってはこの上ない「未知」なのである。われわれがヨーロッパに行くよりもはるかに「未知」の地なのだ。

異なる環境での適応ということで一般的にオリエンティアはタフであるとされているが、さすがに商店街、レストラン、公共交通機関他都市的機能が全く無い純日本風の農村・山村での長期間の滞在はさすがに堪えるであろう。彼らにとってこうした文化風土はあまりにも「未知」なのである。この「未知の国」の「未知のテレイン」という条件はどこの国にも同じ条件である。

竹林。日本では普通にみられるこの風景も北欧人は見たことがない。こういったテレイン慣れるためにモデルイベントやトレーニングテレインがある。

同じ条件で与えられた時間の中で、少しでも「未知」を変えていくか、イギリスチーム（というよりも、ジョン・ダンカン、ジェミー・スチーブンソン、ダニエル・マーストンの主力３名は毎回！３人いればリレーチームを組める！）がすでに３回も来日しているのはまさにこのためである。彼らにとってはまさにビッグチャンスなのである。

逆に、強国（スウェーデン、フィンランド、ノルウェー等）たちにとっては、強国としてのプライドにかけても意地でもその地位を譲ることはできない。どの選手を起用するか、ということで各国、とりわけ選手層が厚い強国のコーチにとっては頭を悩ますことであろう。また、腕の見せ所でもある。選手起用もまた見ものである。環境への対応ということでチーム全体の出来不出来が顕著に現れるかもしれない。天候や雪質への対応に常に迫られるウィンタースポーツに長けたこれらの国にとっては、もしかしたらその経験を置き換えることによって、対応がうまいのかもしれない。しかし、何を置き換えればよいのか。それも「未知」である。

日本のアドバンテージ

それにしてもこの「未知」というのは実はわれわれにとっても「未知」である。ホームでこのような国際舞台を戦ったことがない。まして、8 月。われわれ日本選手ですらオリエンテーリングをするのに尻込みをするような時期である。暑さ、湿気、植生の繁茂、そして地形的にも。それでもわれわれは、そのような環境で毎年夏すごしているわけである。近年、世界のトップ選手が来日した国際大会は 2000 年春の富士山麓でのワールドカップ、2004 年秋の愛知での国際大会、2005 年春の富士山麓での全日本大会などがある。これらは、いずれも外国選手が上位を占めたが、その差はいずれもヨーロッパでの国際大会での差よりは小さい。そして、いずれも今回の愛知世界戦の条件よりも地形的、気候的、植生的にいずれかが緩い。これらがすべて絡んだ今回の愛知世界戦が日本選手にもたらすアドバンテージというのは以前の日本での国際大会よりも大きく働くことは予想できよう。しかし、これがどのくらいのアドバンテージかは「未知」である。

日本でも圧倒的な実力を見せてくれたシモーネ（スイス）。愛知世界選手権で最も期待される選手だ。

「未知」とばかり言っていたら、話が続かない。そして、まだ各国ともどのような選手が代表として来日するかも完全には決まっていない。また、女子では長く主役の一人であったノルウェーのハンネ・スタッフが引退を表明した。その後、新たなビッグネームの名前は聞こえてこない。男子は相変わらずの混戦模様でもう数年間主役不在のままだ。これはますます予想を難しくする。「誰」という名前をキーワードにして話を進めることができないのである。でも、出来る限りの想像力を膨らまして予想をしてみよう。

スウェーデンの核弾頭カロリナ。シモーネの対抗として期待。

ロング決勝は荒れる

特にロングはこのような環境で長い時間オリエンテーリングをするわけだから、最も荒れるレースになろう。たとえ、途中のビジュアル区間まで快調に進んでいても突如、足が止まってしまうこともままあるであろう。レースの後半に大きく順位が変動する。おおきく挽回するというよりも、著しく順位を落とすというような展開である。WOC2003 スイスは連日 40℃近いという観測史上最高気温の中で開催されたわけであった。象徴的なのは男子のロングであり、下馬評にも殆どあがっていなかった（けどスイスにおける期待はきわめて大きかったけど）トーマス・ビューラーが優勝したのは地の利（声援・テレイン）のほかこうした気候への対応という点だったであろう。反面、ビジュアルゾーンまで上位であったフィンランドのパシ・イコネンやマッツ・ハルデンが後半へばってしまったことや、女子で途中棄権したリッサ・アンティアらが印象的であった。実際、冷涼な気候風土に暮らしている北欧の人々にとっては高温への順応は難しい。まして、これに湿気と植生が加わり、消耗を著しくする登りもまた激しい。しかし、逆に、ヨーロッパでもスイスとかチェコといった大陸系の選手にとっては気温と登りという面ではそれほど大きな違和感はないだろう。また、WOC2003 女子で全種目を制したシモーネ・ニグリ・ルダー（スイス）のように実力的が抜きん出ている選手にとってはこうした環境面での問題はあまりないだろう。唯一の抜きん出た存在が、彼女なのである。昨年秋と今年春に来日してその圧倒的な強さのみを見せ付けた。アリーナの観客にとっては、彼女が視界に入った瞬間というのは予想した通りの時間でもあるのだ。彼女に対抗するのが WOC2004 で大活躍したスウェーデンのカロリナ・オルワグ・ヒヨルスガード。2 名の力は抜きん出ている。

ロング予選 ･日本選手は？

さて、距離が短くなるとこうした前述のような「荒れ」は少なくなる。ロングについても予選に関しては、こうした「荒れ」はあまり起きず、予選は 60 分見当のコースなので、むしろ、日本選手にとっては最も苦しい長さになってしまうので思われる。どこまで持つかが予選突破の鍵であろう。逆に予選を突破し、決勝に進出できれば、前述のようなレース展開の中に入ることができ、WOC1997 ノルウェーでロング決勝に出場した村越の「累々とした屍を越えていくようにレースが進んでいった。」という感想のようなレースを味わうことになろう。

マッツ・ハルデン（PWT 名古屋 2004）

ミドル予選突破のカギは

ミドルでは、こうした環境から外国のトップ級選手全体がスピードダウンになる状況が予想できる。よって、日本選手のスピードレンジの中にレースが展開されれば、技術的に鋭いオリエンテーリングができれば「慣れ」が作用して十分決勝進出は見えてくる。同様のことが決勝でも対応できた日本選手がリザルトの中上位に顔を出す可能性も出てこよう。男子のミドルで連覇中のテリー・ジョルジェはフランス人。暑さには問題はない。優勝候補の筆頭である。

スプリント･予選突破に期待

スプリントは地形的にも他種目とは異なり、距離も短いため、前述の環境の違いよる影響はもはやない。しかし、前回の WOC2004 で日本人選手が唯一決勝進出したのがスプリントでもあり、予選突破についてはそれほど驚くような出来事にはならない。普段の日本でのオリエンテーリングと思ってレースをすれば決勝進出に関しては良い結果が得られるだろう。しかし、決勝では力の差がはっきりと出てくることになり、上位進出は難しい。いずれにしても個人種目については、日本選手は予選突破決勝進出が目標とならざるを得ない。しかし、日本選手にはホームアドバンテージで決勝に進出するのではなく、決勝に進出する実力のもとでの決勝進出をしてほしい。ランクアップの原動力にホームアドバンテージを使って欲しい。

リレーは 6 位を期待

最後にリレー。こうした、分析があまり役に立たないのがリレーの不思議さである。同時スタートとチェンジオーバーがこれほどまでに作用するものかと。見えない力が働く。どんなに力があっても、考えられないミスが、世界選手権大会という大きな舞台で何度も起きている。そして、予想外の活躍も。唯一予選がなく即決勝のレースである。そして、外国選手にとっては長期の異文化異風土での滞在ということで、肉体的にも精神的にも相当なストレスがたまっている時期でもある。何かが起きるに違いない。そのために不可欠なことは観客の声援。アリーナに響き渡る声援が日本チームを「未知」のゾーンへ導くことになろう。上位集団の中での 1 走から 2 走へのチェンジオーバー。2 走での一流国の考えれらないミスでの脱落、そして、アンカーの粘りで抜け出して 6 位に滑り込む。入賞、表彰台。それはまた、日本のオリエンテーリングが世界の舞台へ向かっての「道」である。

ヨーロッパ文化の中に浸っていたオリエンテーリングがワールドワイドなスポーツとなった瞬間であり、同時に世界のオリエンティアにとっても新たなオリエンテーリング文化への挑戦のはじまりでもある。

（小林岳人）